

特集

## Animal assisted intervention (AAI) への道のり

土田あさみ

動物介在教育・療法学会 理事  
東京農業大学

### 小学校での動物飼育と動物愛護

日本では明治の末頃より今日に至るまで動物を小学校で飼育してきた（鈴木哲也 2003, 2010）。明治の頃は理科教育として、戦後教育の中では道徳教育として行われてきた。道徳の教科は1961年（昭和36年）に始まり（「学習指導要領の変遷」より）、その具体的な目標の中で「やさしい心を持って、動物や植物を愛護する：学習指導要領（昭和33年10月1日施行）」ことを例示した。このように、明治末から続けられてきた小学校での動物飼育は当たり前のことだった。神奈川県厚木市の市立小学校における飼育小屋設立年を学校要覧や記念誌、学校沿革史、そして卒業アルバムでの記録をたどって調査したところ、確認された最も古い設立年は1972年（昭和47年：当時厚木市立小学校は9校で、うち1校が該当した）で、1970年代から1990年代にかけて集中していた（図1、山下2013：2000年までに19校となり、19校すべてに確認された）。これは、1973年（昭和48年）に「動物の保護及び管理に関する法律」が制定されたことや1989年（平成元年）に新設された生活科が1993年

（平成4年）から実施となり、道徳教科と同様に動物飼育が内容に含まれたことが影響していると考えられる。小学校に入学したらウサギかニワトリ、あるいは小鳥がいて、それを世話する、というのはこの時代の小学生にとって何の疑問もないことだった。そして、この時代には小学校に住み込みの学校用務員がいて、休みの日の動物の世話をしてくれていたもので、今日にみられる休み中の動物の世話をどうするかという問題は起きなかったし、動物の世話に休みがないということに誰も気が付かなかった。ウィキペディアによれば、学校用務員は1980年代前半までは学校内の宿舎に住み込みで勤務していた。小学校での動物飼育は管理体制を整えることができれば教育的効果はみられる（中島他 2011）が、住み込みの学校用務員がいなくなった現在の小学校で動物管理を教師と児童で適正に行うには課題が多い（柴田 2015；Tsuchida *et al* 2010）。現在、動物福祉やアレルギー、高病原性鳥インフルエンザの流行等の衛生問題があって、小学校での哺乳類や鳥類の飼育は減少の一途をたどっている（朝日新聞2月11日付記事より）。

私たちは、小学校に住み込み学校用務員がいなくなって、動物の世話を休日にできない状態であっても、小学校で動物を飼育することに疑問を持たなかった。このように、飼育環境が動物自身にとってどうかという視点を私たちは持たなかった。そのような時代に、「人と動物の関係」という視点やその関係に基づいた計画的で積極的な動物の利用と、それに伴う動物福祉に関する情報が欧米から到来した。到来は、おそらく1980年代後半から1990年代初めごろにかけてのことではないかと思われる（後述）。小学校での動物飼育だけでなく、動物とのふれあいが人に良い影響を与えるという事実は、小学校に動物がいてふれあったり、自宅にペットがいてふれあっている者にとって自明のことだった。その自明のことを科学的に明らかにしようとしたのが、「人と動物の関係学」分野である。

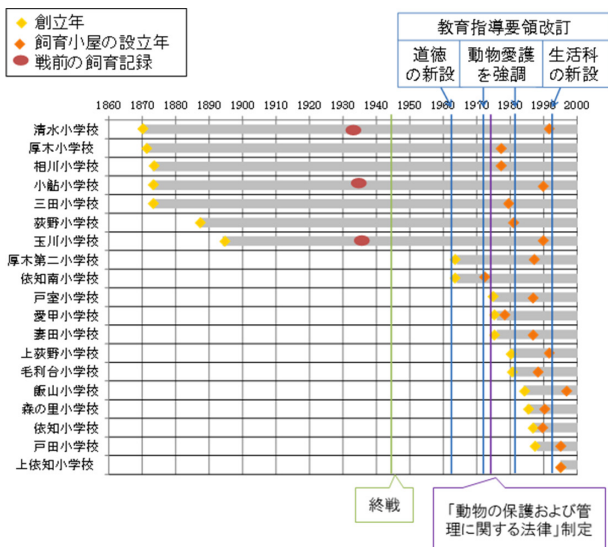


図1 厚木市立小学校における飼育小屋の設立年（山下2013より）

## 動物介在介入とは

自身が飼育しているイヌと対面した子どもの患者の態度や行為から、患者がイヌとかかわることが心理治療に非常に有効であることに偶然にも気づいたのが心理療法家の Levinson B M であった。Levinson はこれを Pet Therapy として 1961 年にニューヨークでの心理学会に発表した (Mallon 1997: Pet-oriented child psychotherapy 2<sup>nd</sup> edition の序章より)。以来、人の治療的介入の際に動物を利用する効果に関する研究等が盛んになった。現在動物を利用した介入は心理療法だけでなく、医療関係、福祉や教育など広い領域で展開されており、一般的には動物介在介入 (Animal assisted intervention: AAI) と呼ばれている。日本における AAI の始まりは、日本動物病院協会 (Japanese animal hospital association: JAHA) が 1986 年から展開した活動からであろう。これは通称 CAPP (Companion animal partnership program) 活動と呼ばれ、病院や一般家庭で飼育されているイヌやネコを連れて高齢者施設等を訪問する活動で、動物を用いた活動が人に良い効果を与えることを実践して示した。CAPP 活動は現在も医療施設や高齢者施設を対象に継続的に行われている。

AAI は、人と動物の関係に関する国際組織、International association of human-animal interaction organizations (IAHAIO) が公表している IAHAIO 白書 2014 によれば、

- (1) 動物介在活動 (Animal assisted activity: AAA)
- (2) 動物介在療法 (Animal assisted therapy: AAT)
- (3) 動物介在教育 (Animal assisted education: AAE)

に区分されている。AAT は身体面、認知面、行動面、あるいは社会的な感情面などに不都合のある人を対象者として、それらに関する資格あるいは資格と同等の技能をもった健康や教育、あるいは福祉系の専門家によって実施される治療的介入をいう。AAE は教育や教育関連業務の専門家によって行われる教育である。補習などの特別な教育を目的とした場合は治療的な意味合いも含まれる。AAA は人と動物がペアになったチームがある目的のために実施するレクリエーションの一種である。いずれも人の健康や教育の専門家が目的をもって対象者に介入する時に、AAI のために特別に訓練された動物の手助け (assist) を得るといふ、計画的に行う介入である。

AAI では人に関係する専門家、例えば教師、医療関係者、福祉関係者などが動物を使った介入をすることもあれば、かれらが動物と動物を扱う人 (ハンドラー) のチームと連携して行うこともある。AAT や AAE はそれぞれ医療関係や教育関係の専門家が計画し主導してその効果を評価するという、AAA より専

門性の高い活動である。定義からすると、AAT や AAE の実践者は人の専門家でありながら動物の管理から行動の制御 (ハンドリング) まで行うことができる、高い専門性と幅広い技能を有した者である。かつ、人の専門家なので、動物を使わなくても、AAI と同様の内容を対象者に対して行うことができる者である。要するに、AAI 実践者は看護師、作業療法士、理学療法士、介護福祉士、あるいは教師など、人にかかわる専門の資格を持っていることが望まれる。Levinson によれば、AAI は対象者が動物と関わる場を計画的に設定して、対象者の言動の変容から対象者の状態を把握し、それを次のステップのための情報とする手法である。AAI を構成する要素は、対象者、対象者に介入する実践者 (教師、医療関係者、福祉関係者など)、そして実践者を補助する動物と、明確に立ち位置や役割が区分されている。AAI 実践では、対象者の人権保護や動物による事故が起きないようにすることはもちろんであるが、動物を使いすぎたり、実践中に動物に対して事故が起らないように、動物を守る必要もある。AAI は、モノではなく生身で交歓する活動なので相互の理解と擁護のための配慮と準備と環境設定が重要である。

## AAI 実践者の養成

現実には人にかかわる専門の資格を持っている上に、AAI に適性を持つ動物を保持し、さらにハンドリングもできるという AAI 実践者は稀有である。そこで実際には、動物を扱える者が AAI にかかわる分野を学修し、AAI 実践者となって AAI を行っている例は多い。例えば、自閉症児に対する AAI 報告を詳細に分析した O'Haire (2013) は、対象児に介入しているのは、作業療法士や治療者もいるが、動物のインストラクターやトレーナーもいることを紹介している。自閉症児を対象とした乗馬療法の効果をみた Gabriel ら (2012) の報告では、対象者への介入はウマのインストラクターが AAI 実践者として務めており、乗馬による効果が対象者の行動で認められている。また、認知症患者がウマの牧場を訪問する活動 (Dabelko *et al* 2014) では、ウマ介在活動の専門家が AAI 実践者となっているが、対象者に生理的な効果は認められなかったものの自発的な行動がみられ、問題行動の減少も認められている。このように、必ずしも人に関する専門家が AAI 実践者でなくても、AAI のための学修訓練を受けた者が適正に役割を果たせば、AAI は可能であることが理解される。人に関する専門家で動物を扱える人が数少ない現状で AAI を普及するには、AAI を学修して計画実行できる実践者の育成が必須である。

しかし、動物はかかわる人に何らかの効果を与えるということは、動物を安易に使用する状況を生みやすい。動物を補助として人に介入する目的よりも、動物を使うことが目的となって活動が行われる恐れが生じる。だからこそ、IAHAIOの白書でAAIの質保証として定義が提唱されていると考えられる。人が人に介入する場では、相互に心理面や生理面などにおいて影響が認められるだろうことは想像に難くない。AAIの場合、実践者が対象者に介入することから、実践者の介入する技量はAAI対象者に何らかの影響を与えると予測される。これまでのAAI実践の報告からは、AAIの評価指標が示した効果にAAI実践者の効果が含まれているかどうかは明らかでない。筆者はウマのブラッシング実験で、実験前にハンドラーが対象者に伝えるブラッシング作業についての解説にブラッシングの目的を加える条件(図2;有)と加えない条件(図2;無)を設定し、作業目的の情報の有無が対象者に影響するかどうかを調査した。対象者がウマをブラッシングしている間ハンドラーから対象者への声掛けは行っていない。ここでは心理検査(二次元気分尺度:坂入ら2003)の結果を示す。これは8つの質問からなるセルフモニタリング方式で、「全くそうでない」の0点から「非常にそう」の5点までを一つ選択して回答する。回答された8問の数値を採点して、活性度(快適な興奮と不快な沈静を両極とする心理状態)と安定度(快適な沈静と不快な興奮)を算出し、活性度と安定度を加算した値を快適度(快と不快を両

極とする心理状態)とする。その結果、目的を加えた条件(有)では対象者の活性度と快適度が有意に上昇し、加えなかった条件(無)では安定度が有意に上昇した。ウマのブラッシングは対象者の気分を改善する効果があったが、事前の説明はこれをさらに有効なものにした。これはAAI実践者による対象者への直接的な影響を明らかにしたものではないが、動物とかかわるときに実践者が提示する情報が、動物とふれあう者の気分に影響を与える可能性を示した。このことから、AAI実践者には、AAI対象者は動物がいることやふれることによる効果の他に、AAI実施に際しての情報提示からも心理的な影響を受ける可能性のあることを把握した上で、目的に則した介入を行う技術と経験が要求されよう。

さらに、AAI実践者は人に関する幅広い知識を要するだけでなく、人側と動物側双方に生じるリスクを管理する責任と、実践における動物の福祉を守る責任もある。最も注意すべきは人獣共通感染症の防止である。そして、動物の扱い方である。先にふれた「動物愛護」は、「やさしい心を持って、動物や植物を愛護する」という人側の意識で動物を配慮する考え方であるが、「動物福祉」は、「5つの自由」(①飢えと渇きからの自由、②不快からの自由、③痛み、けが、病気からの自由、④正常行動を発現する自由、⑤恐怖と苦悩からの自由)という、動物の側に立って動物を配慮する考え方である。動物を配慮するという点では両者は同じだが、人側から(動物愛護)と動物側から(動物福祉)という視点の位置が違う。「5つの自由」を評価するには、対象となる動物の生理や生態、行動上の特性、個体の気質、飼育環境条件などの情報が必要になる。もっとも、これらの判断も評価者が人なので、評価者の経験値や主観が含まれるのは免れない。評価者がいかに客観性を保ち得るかが評価の妥当性を決めると考えられる。AAIは「動物愛護」ではなく「動物福祉」の立場で行う活動である。このように、AAI実践者は、AAIを安全に実施するため、非常に多くの知識を求められている。AAI実践者の養成には多様な経験ができる機会を数多く提供できる環境が必要だろう。

先述の学校飼育動物においても、世話による児童への教育的効果は重要な点だが、動物の状態を考えて飼育したり利用するなど、動物福祉の観点が求められる。現代は、動物を扱うこと全般に対して動物福祉の観点を考慮しなければならない時代である。

### AAIに適性のある動物の育成

AAI実践者の養成もさることながら、適性のある動物の育成もAAIの普及の鍵になる。IAHAIO白書

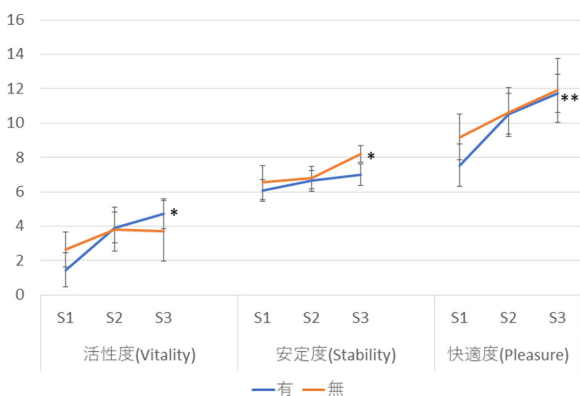


図2 ウマのブラッシング実験における気分尺度スコアの変化  
 ブラッシング者のブラッシング前後における気分尺度の変化を測定した。  
 実験条件：ブラッシング前の事前説明に、ハンドラーがブラッシング者にブラッシングの目的を加えた条件(有)と加えなかった条件(無)  
 S1：ブラッシング前、S2：ブラッシング途中、S3：ブラッシング後  
 フリードマン検定：\* p < 0.05, \*\* p < 0.01

では、AAI で用いる動物は AAI 活動を楽しむことができる個体であることを条件に挙げている。イヌの場合の適正評価のための項目として、衛生や健康管理の面、行動面、そしてイヌとハンドラーとの関係性の面等が挙げられる（内田 2010）。動物を評価するためには評価者が必要であり、実践者だけでなく評価者の育成も不可欠となる。

AAI で最も活躍しているのはイヌとウマである。それはかれらが、人が食べるためではなく道具の役割を担わせるために品種改良されたからだろう。イヌの場合、日本での飼育頭数は現在およそ 880 万頭（ペットフード協会統計資料 2019 年度版より）である。この中から AAI に適性のあるイヌはどれくらいいるだろうか。盲導犬を例にとると、生まれた幼犬を人社会に馴染ませるために一般家庭に育ててもらい、その後盲導犬としての訓練を施すなど、盲導犬育成はある程度システム化されている。それでも盲導犬訓練学校を盲導犬として卒業できるのはおよそ 3 割といわれ（兵庫盲導犬協会 HP より）、未だ安定供給には遠く人工繁殖が検討されている（鈴木 2009）。盲導犬のこの合格率は、日本で AAI に適性をもったイヌの育成に心細さを感じさせる。たとえ AAI に適性のある個体があったとしても、AAI 活動を行う年齢では、おそらく、すでに避妊去勢が施されており、血統を残すことが不可能になっている。そのため、適性を発掘して育成するのも重要であるが、適性のあるイヌを若いうちから見出して繁殖に回す仕組みも必要である。AAI に用いる動物の適性を見極めるための指標に関する研究が待たれる。

日本における AAI 普及の道のりには、用いる動物の適性や気質という動物側の条件、動物をハンドリングする技術や AAI の動物として評価する評価者としての技能という人側の条件、そして AAI 実践者を希望する人が学修し実践の経験を積める機会の提供という環境条件等、多くのハードルが横たわっている。

## 引用資料

Dabelko-Schoeny H, Phillips G, Darrrough E, DeAnna S, Harden M, Johnson D, Lorch G. 2014. Equine-assisted intervention for people with dementia. *Anthrozoös*, 27, 141-155.  
 学習指導要領（昭和 33 年 10 月 1 日施行）。第 3 章 道徳、特別教育活動および学校行事等より：第 2 内容（16）  
<https://www.nier.go.jp/guideline/s33e/chap3-1.htm>（最終閲覧日 2020.3.26.）

学習指導要領の変遷。 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/\\_icsFiles/afiefieldfile/2011/04/14/1303377\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/_icsFiles/afiefieldfile/2011/04/14/1303377_1_1.pdf)（最終閲覧日 2020.3.26.）  
 IAHAIO 白書 2014（2018 年改訂版）：[https://iahaio.org/wp/wp-content/uploads/2019/01/iahaio\\_wp\\_updated-2018-19-final.pdf](https://iahaio.org/wp/wp-content/uploads/2019/01/iahaio_wp_updated-2018-19-final.pdf)（最終閲覧日 2020.3.24.）  
 Mallon G P. 1997. *Pet-oriented child psychotherapy 2<sup>nd</sup> Edition*, Levinson, B M. Revised and updated by Mallon G P. Charles C Thomas · Publisher, LTD. Illinois.  
 中島由佳, 中川美穂子, 無藤隆. 2011. 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響. *日本小動物獣医学会誌*, 64, 227-233.  
 O'Haire M E. 2013. Animal-assisted intervention for autism spectrum disorder: A systematic literature review. *Journal Autism and Developmental Disorders*, 43, 1606-1622.  
 ペットフード協会統計資料：<https://petfood.or.jp/data/chart2019/3.pdf>（最終閲覧日 2020.3.26.）  
 Tsuchida A. 2010. Preliminary evaluation on the use of an animal care journal written by elementary school students to monitor animal welfare and humane attitudes. *Journal of Animal-Assisted Education and Therapy*, 2, 5-12.  
 坂入洋右, 徳田英次, 川原正人, 谷木龍男, 征矢英昭. 2003. 心理的覚醒度・快適度を測定する二次元気分尺度の開発. *筑波大学体育科学系紀要*, 26, 27-36.  
 柴田恵美子. 2015. 名古屋市における獣医師による学校飼育支援活動後に得られたアンケート回答からみる動物飼育の教育的効果と今後の課題. *動物臨床医学*, 24, 158-164.  
 鈴木哲也. 2003. 学校飼育動物小史—明治・大正時代の学校動物飼育. 学校飼育動物と生命尊重の指導, 鳩貝太郎・中川美穂子編集, pp68-71, 教育開発研究所, 東京都.  
 鈴木哲也. 2010. 明治後期から大正期における「学校飼育動物」の導入課程. *秀明大学紀要*, 7, 160-175.  
 鈴木宏志. 盲導犬の人工繁殖. *日本補助犬科学研究*, 3, 9-16.  
 社会福祉法人 兵庫盲導犬協会 HP より：<http://www.moudouken.org/about-guide-dog/qa/>（最終閲覧日 2020.3.26.）  
 内田佳子. 2010. 動物介在教育・療法における共通理念と犬の評価方法. *動物介在教育・療法学雑誌*, 2, 19-20.  
 山下知子. 2020. 「小学校の飼育小屋 消える鶏」. 朝日新聞令和 2 年 2 月 11 日（火）付記事.  
 山下由佳里. 2012. 学校飼育動物の歴史についての調査. 伴侶動物学研究室卒業論文要旨集, 4, 68-69.  
 ウィキペディア. 「学校用務員」：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%94%A8%E5%8B%99%E5%93%A1>（最終閲覧日 2020.3.27.）